

三十二 室戸台風

昭和九年九月二十一日、関西の大風水害のとき、京都の中学校で一番大きな被害を受けたのは両洋だったのです。校舎は全焼し、生徒が二十一一人亡くなり、大きな被害を受けたのでした。それで世間の同情が集まっているので、焼け太りで立派になるといふ噂が立ち、また一方では両洋は再起不能といふ噂さえ流れたものでした。そして今音楽会を開けば世間の同情もあるから建築資金はすぐ集まるといって、音楽会を開くように勧める人もあつたのですが、兄は開かなかつたのです。また卒業生や父兄たちが寄付金を持つて来ると受け取らなかつたのです。兄は人から助けられることの嫌いな人で、お金に関しては全く無頓着で、そういうものには気が向かなかつたのです。そして焼けてから四日目、校庭の森の中にテントを張つて授業をしたのを自慢にしたのでした。したがつて焼け太りどころではなく焼け細りになつてしまつたのです。

関東大震災のとき、被害を受けた学校が文部省から金を借りたのですが、それを払わないでいるそうです。そのため今度の関西の台風で被害を受けた学校が、文部省から金を借りようとしても貸してくれないのです。両洋は保険をかけていたのが少しばかりあつたのと、それに保護者の中に窪山直吉という人がおられ、この方のおかげでバラックの校舎がようやく出来たのでした。